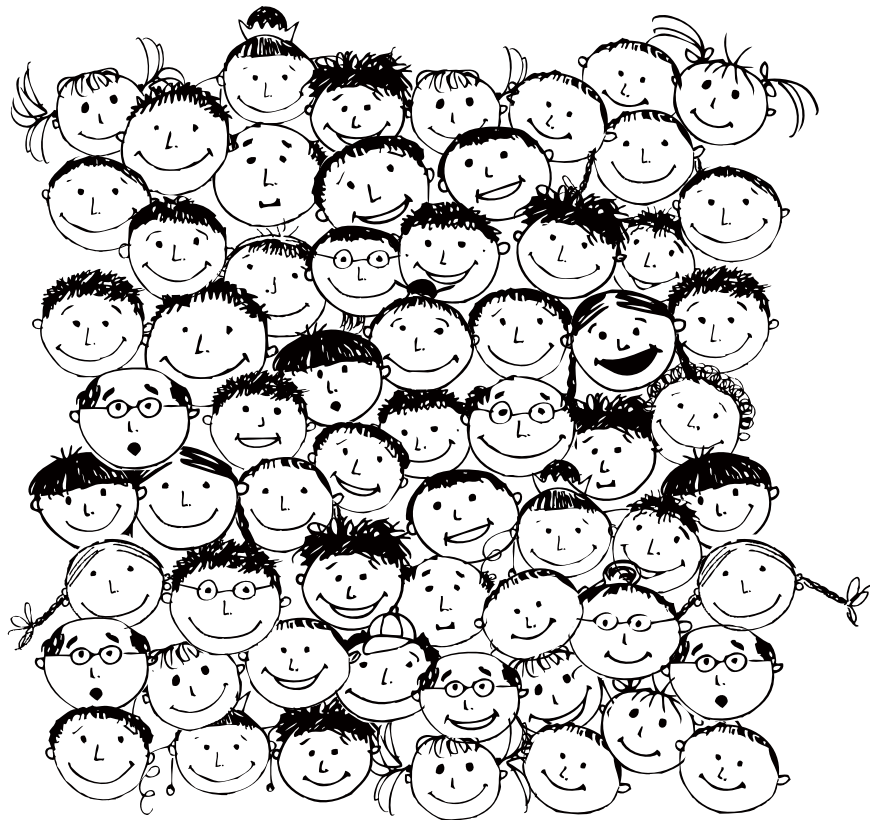


ミュージアムを中心とした 地域の多文化共生プロジェクト報告書

2019



たまろくミュージアム多文化共生推進実行委員会

—目次—

はじめに	…	1
1. 事業概要	…	3
2. 博物館における多文化共生に関するアンケート		
2-1 調査概要	…	5
2-2 基本属性	…	5
2-3 外国人を対象とした情報提供について	…	8
2-4 多文化共生プログラムについて	…	10
2-5 まとめと今後の課題	…	13
別紙 アンケート調査用紙	…	14
3. ヒアリング調査		
3-1 豊橋市中央図書館	…	22
3-2 一般社団法人 Kuriya	…	25
3-3 アーツ前橋	…	27
3-4 北九州市立自然史・歴史博物館	…	32
4. 当館におけるやさしい日本語事業		
4-1 やさしい日本語による WEB 等の情報公開	…	35
4-2 やさしい日本語スタッフ研修	…	36
4-3 やさしい日本語を用いたプログラム	…	37
5. ICOM-CAMOC との共催事業		
5-1 ICOM-CAMOC ポストカンファレンスツアー	…	41
5-2 ツアー参加者	…	41
5-3 多摩六都科学館	…	42
5-4 小平市ふれあい下水道館・玉川上水	…	44
5-5 六本木ヒルズ展望台・森美術館	…	45
5-6 東京都美術館	…	46

はじめに

1. 本報告書は、たまろくミュージアム多文化共生推進委員会が、文化庁の平成 31 年度文化芸術振興費補助金「地域と共働した博物館創造活動支援事業」（博物館を中核とする文化クラスター形成支援事業）の助成を受け行っている「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プロジェクト」の調査および事業の報告である。

2. 本プロジェクトの背景および目的を以下に記す。

東京オリンピック 2020 を控え、都内に限らず国内中で外国人観光客の増加を見込み、街中のあらゆる場における多言語化がすすめられている。博物館においてもその追い風を受け、WEB ページやパンフレット等の広報媒体メディアを中心とした多言語化に着手する施設が増加している。あわせて、展示解説についても、ICT による多言語化や、外国語を話すボランティアの育成と導入等、様々なニーズに応える取り組みが行われつつある。一方で、政府による外国人労働者の受入政策の転換による外国人居住者の増加に対する対応が急務となる。現在の外国人居住者に向けた取り組みについては、各行政の多文化共生プランの文脈において、各種手続きおよび防災面についての取り組みがはじまっているが、博物館による取組は一部の美術館を除き、非常に少ない状況にあるといえる。

多摩北部においても外国人居住者人口は増加の傾向にある。多摩北部の行政 5 市が連携し多文化共生に関する取組を推進している他、東村山市では独自の多文化共生推進プランの策定、小平市では、オリンピック開催にあわせておもてなし事業を展開している。しかしながら博物館施設自ら働きかけ取り組むことも難しく、かつ外国人居住者との接点を持つことができていないといった課題がある。以上の現状を踏まえ、当館が目指すべき方向性として掲げる 2 つのミッション「誰もが科学を楽しみ、自分たちの世界をもっと知りたいと思える多様な学びの場をつくりあげること」、「活動の幅を拓げ人々をつなげ地域づくりに貢献すること」、第 2 次基本計画ローリングプラン 2016「ソーシャル・インクルージョンに基づき、誰もが楽しみ、交流できる場をつくりあげること」の一プロジェクトとして、在住外国人をターゲットとした多文化共生推進プロジェクトを立ち上げた。ここでは、本プロジェクトで 2019 年 5 月～2020 年 2 月に行った調査、やさしい日本語事業、国際交流事業を報告する。

3. 本プロジェクトの実施にあたっては、下記の実行委員会および事務局を組織し、会議を設け意見交換や報告会を行うとともに、アンケート調査および関係機関のヒアリング調査、プログラムの企画・実施・評価、ICOM 京都 2019 にあわせ、ICOM-CAMOC（都市博物館国際委員会）と共に国際交流イベントの企画運営を行った。

会長	高柳雄一	多摩六都科学館館長
副会長	山辺真理子	NPO 法人西東京市多文化共生センター代表理事
委員	チョウ・チュンニ	ICOM- CAMOC（都市博物館国際委員会）理事
委員	廣澤公太郎	多摩六都科学館統括マネージャー
幹事	手塚光利	多摩六都科学館組合事務局長
事務局長	高橋純一	多摩六都科学館経営管理グループ リーダー
事務局	高尾戸美	多摩六都科学館研究・交流グループ リーダー
	石山彩	多摩六都科学館 PR グループ リーダー
	安倍覚子	多摩六都科学館 PR グループ
	蓮田安紀	多摩六都科学館 PR グループ
	佐怒賀陽子	多摩六都科学館経営管理グループ
	原窓香	多摩六都科学館組合

1. 事業概要

1. 事業概要

(1) 本事業が目指すもの

多摩六都科学館では、科学館の目指すべき姿として、第2次基本計画ローリングプラン 2016において、「ソーシャル・インクルージョンに基づき、誰もが楽しみ、交流できる場をつくりあげること」を掲げていることは前述したが、これらに基づき立ち上げられた多文化共生推進プロジェクトでは、多摩北部の博物館が多文化共生社会を担う場を実現する場になること、これらが我が国の地方都市博物館の多文化共生モデルとなることを目指し、以下の3つを目的としている。

- ① 我が国の博物館における外国人居住者に対する事業の現況を明らかにする。
- ② 地域の多文化支援実践者と共に、外国人居住者向けサービスの向上を目指した博物館の環境整備および教育プログラムの企画開発を実施、評価を行うとともに、多摩地域および本テーマに興味関心を持つ人々のコミュニティを構築する。
- ③ ICOM 京都 2019 の開催をきっかけに、多摩北部と世界中の博物館関係者が多文化共生をテーマとした取組について情報交換や相互協力の機会を創出する。

日本語が母語でない方々の生活を豊かにするための場としての科学館

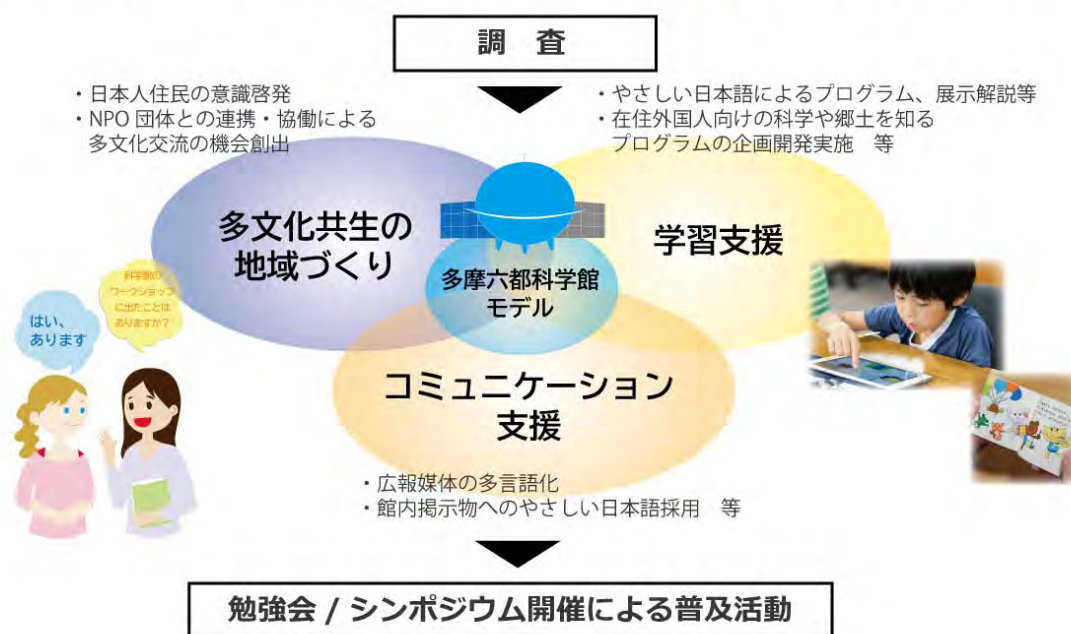


図1 多摩六都科学館が目指す多文化共生推進モデルのイメージ

(2) 5つの計画

これらの実現のため、多摩六都科学館では以下の5つの取り組みを計画し、今年度は①博物館等における多文化共生の取り組み実態調査、②科学館の多文化共生および多言語化のサービス向上のための環境整備、③ICOM 京都 2019、都市博物館国際委員会 (CAMOC) との共催事

業の開催を実施した。

① 博物館等における多文化共生の取り組み実態調査

- ・国内の博物館における在住外国人を対象とした取り組みアンケート調査
以下を対象に、2020年1月に実施
 - a. 全国科学博物館協議会加盟館
 - b. 全国科学博物館連携協議会加盟館
 - c. 東京都内文化施設
- ・国内の博物館その他の多文化共生の先進事例ヒアリング調査
 - a. 豊橋市中央図書館
 - b. 一般社団法人 kuriya
 - c. アーツ前橋
 - d. 北九州市いのちのたび博物館（事例調査④）

② 科学館の多文化共生および多言語化のサービス向上のための環境整備

- ・多摩六都科学館 WEB へのやさしい日本語ページの実装
2020年2月に公開
- ・やさしい日本語スタッフ研修
2019年10月に実施
- ・地域在住外国人向けの特別講座の企画開発
2020年1月に実施

③ ICOM 京都 2019、都市博物館国際委員会（CAMOC）との共催事業の開催

- ・ICOM 京都 2019 大会後の特別プログラムとして、ICOM 会員を対象とした東京都下の市民生活の姿と都市博物館の役割を視察・体験するツアーのコーディネート
- ・世界の博物館スタッフと科学館スタッフによる多摩北部地域の多文化共生の在り方の検討および意見交換
2019年9月に実施

④ 博物館と多文化共生に関する講演会およびワークショップの開催

⑤ 博物館における多文化共生の取り組みに関するシンポジウムの開催

※④⑤は次年度以降、計画を行う

2. 博物館における多文化共生に関するアンケート

2. 博物館における多文化共生に関するアンケート調査

2-1. 調査概要

本調査は、全国の科学館・自然史系博物館及び東京都内の文化施設（博物館・資料館・美術館・動物園・水族館等）における多文化共生に関する取り組みの現状を把握することを目的として実施したものである。

全国科学博物館協議会の加盟館、全国科学館連携協議会の加盟館および東京都内の文化施設あわせて540館を対象に、多文化共生の取り組みに関する32の質問項目について、郵送メールおよびGoogleフォームのいずれかによる自記式によるアンケートを実施した（質問紙については別紙参照のこと）。回答期間は、2020年1月10日から2月18日までの計39日間である。

本調査の回収結果は、回収数310件でそのうち有効回答数は308件、有効回答率は57%であった。以下、主要な質問項目についての分析を行う。

2-2. 基本属性

(1) 館種

回答のあった307件のうち、科学館が最も多く全体の約20%を占めている。次いで総合が17%、歴史が13%、美術が10%、自然史が8%となっている。その他と回答した施設として、水族館、産業技術、文学、動物園、植物園、民俗、考古等がある。

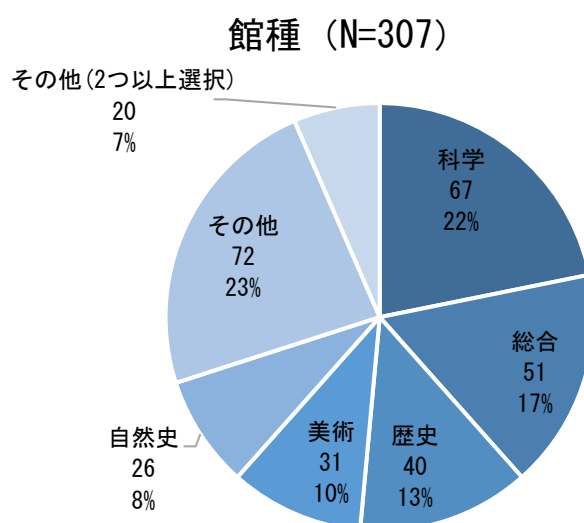


図1 回答施設における館種の割合

(2) 多文化共生の担当者

本アンケートの回答(307件)の約90%が多文化共生の担当ではないと回答した。また、多文化共生の担当を設けていないと回答した施設は7施設あった。

(3) 利用者に関する情報について

回答施設における利用者情報について、年間の利用者総数回答割合及び外国人利用者数について以下に示す。

①2018年度の利用者数(N=270)

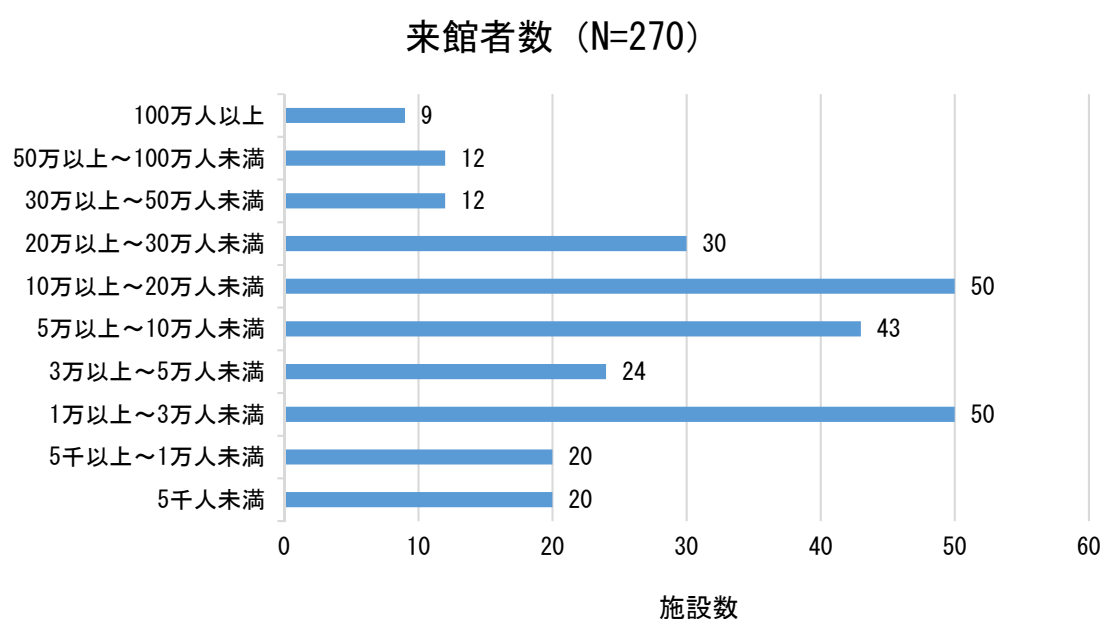


図2 年間利用者数

②2018年度の外国人利用者(N=288)

回答のあった288施設うち、276施設(96%)で外国人利用者がいると回答した。外国人利用者数については72施設が回答している。1人～5百人未満が37施設(約50%)、5百人以上～1千人未満が3施設(約4%)、1千人以上～5千人未満が18施設(約25%)、5千人以上～1万人未満が6施設(約8%)、1万人以上が8施設(約11%)である。1万人以上の外国人が来館すると回答した8施設のうち、10万人を超える施設は1施設のみであった。

外国人来館者の有無 (N=288)

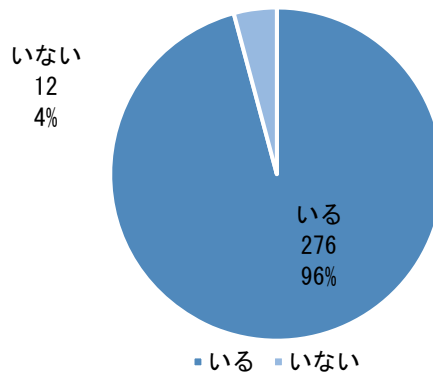


図3 外国人利用者の有無

外国人利用者数 (N=72)

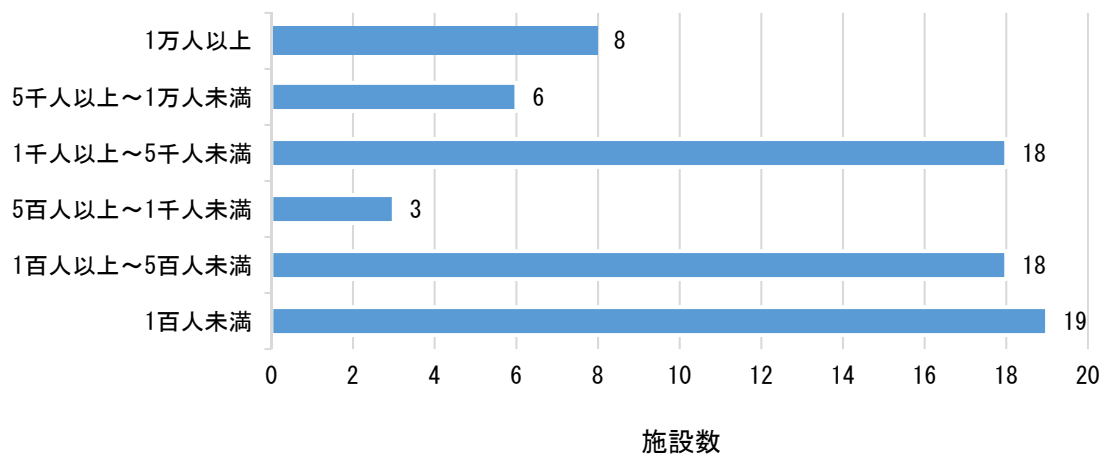


図4 外国人利用者数

2-3. 外国人を対象とした情報提供について

(1) 情報提供の有無

外国人向けの情報提供について実施していると回答した施設は約7割であった。

情報提供の有無 (N=307)

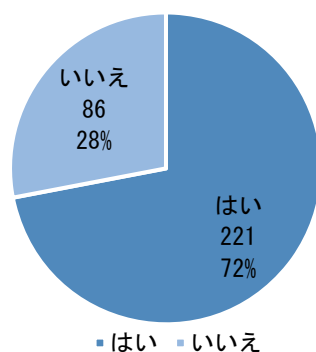


図5 外国人を対象とした情報提供の有無

(2) 情報提供の手法

情報提供の手法として最も多いものはパンフレットであり、約40%が実施していた。なお、情報端末サービス等の具体的なツールとしては、ポкетーク、ポケット学芸員が挙げられていた。その他には、音声ガイド、外国語ツアー、情報誌やSNSの活用などの回答がみられた。

外国人向け情報提供の種類

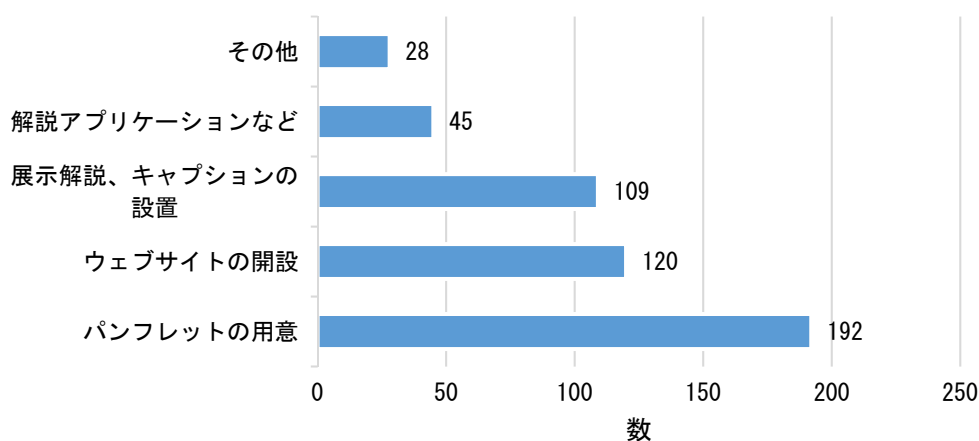


図6 外国人を対象とした情報提供の手法

(3) 日本語以外の言語の使用状況

外国人対応のために用いている言語については、2～3種類の言語を使用している施設が最も多く、47%であった。一方で1種類のみ使用している施設は37%、4種類以上使用している施設は2割弱であった。

言語については、英語が最も多く、次いで中国語、韓国語が使用されている。また、やさしい日本語を導入している施設は40ある。その他には、10か国言語、自動翻訳機による対応言語、ホームページのGoogle翻訳対応の言語等が含まれている。

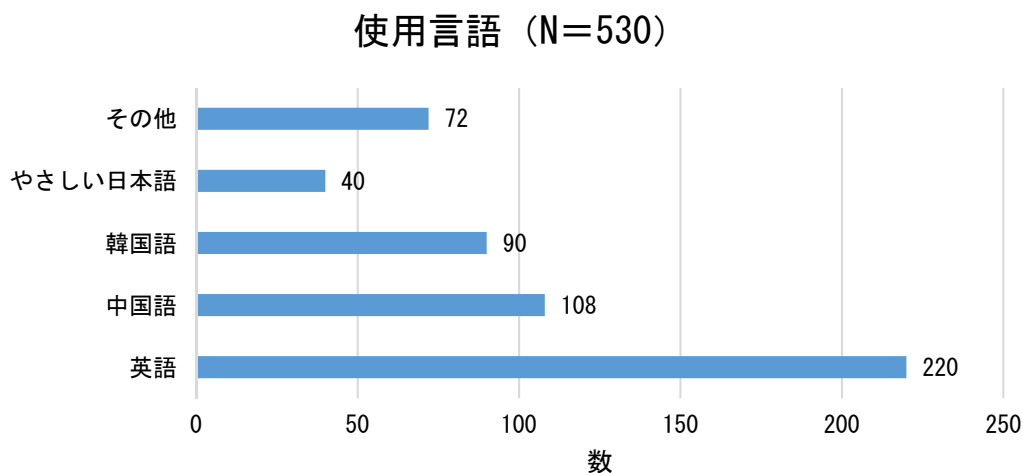


図7 情報提供で採用している言語

(4) 日本語以外の言語の使用状況

外国人対応のための職員については、全体の25%がいると回答した。対応する職員は、日本人職員と回答した施設が最も多く47(63%)、次いで日本人ボランティア14(19%)、外国人職員8(11%)、外国人ボランティア8(7%)であった。ソーシャルメディアなどのツールを活用して外国語による案内を行う施設もあった。

外国人対応者の有無 (N=223)

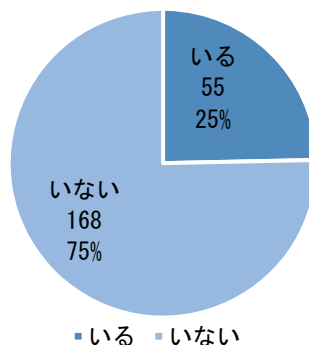


図8 外国人対応スタッフの有無

2-4. 多文化共生プログラムについて

(1) 多文化共生プログラム実施の現状

多文化共生についてのプログラムおよびイベント等を実施している施設は約 1 割程度であった。

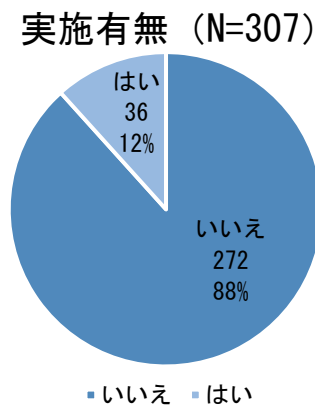


図9 多文化共生プログラム実施の有無

(2) 多文化共生プログラムの実施について

①実施理由

実施の施設に対する実施およびこれから実施する理由を以下に示す。

最も多い理由は外国人来館者の対応 (19 件) である。次いで来館者の誘致 (14 件)、地方自治体等関係団体からの要望 (13 件)、設置者の方針、オリパラ等イベントのインバウンドが同数の 11 件、その他 (4 件) である。

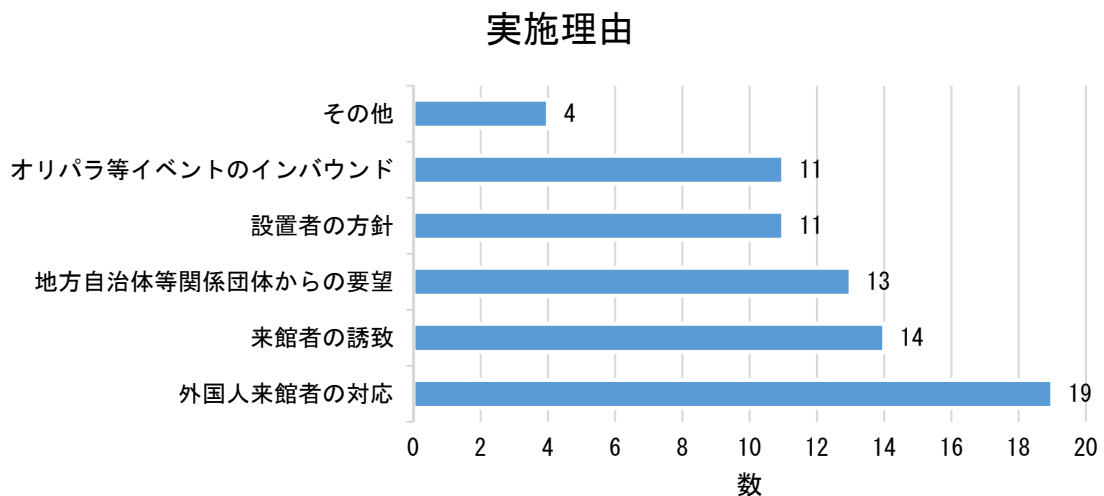


図10 多文化共生プログラムを実施する理由

②未実施理由

未実施の施設に対する実施しない理由を以下に示す（複数回答）。

多い理由は人手不足であり、約4割、予算の関係上が約3割と続き、ニーズがないという回答もみられた。この他、地域の支援が得られない（2%）、その他（5%）、無回答（2%）であった。その他については現在検討中である、設置目的外であるため等の回答があった。

③実施体制

取り組みの実施体制について、36の回答があった。独自事業であると回答した館は22で、独自事業でないと回答した施設は13、不明と回答した施設が1であった。

独自事業でないと回答した館に対して関係団体を調査した（複数回答可）。自治体関係が9と最も多く、次いでNPO等の外国人支援団体5、大学等の研究組織1、民間企業1、その他4であった。その他の回答として在住外国人、大使館等やインターナショナルスクール等があった。

(3) 具体的な取り組みの傾向

①主な取り組み内容

取り組みについて回答のあった35件の傾向は、大きく分けて、a.外国語による博物館情報へのアクセシビリティの向上、b.国際交流における研修またイベントの実施、c.やさしい日本語の導入の3つに分類することができる。

a.外国語による博物館情報へのアクセシビリティの向上

外国語を用いた情報提供としては、情報発信、常設展示、展示案内、企画展の4つがある。

表1 外国語による博物館情報へのアクセシビリティの向上

情報発信	外国語のパンフレットやリーフレット、ホームページの作成等
常設展示	展示図録やキャプションの外国語訳、または外国語で解説するプラネタリウム番組の作成・実施等
展示案内	外国語によるガイドツアーや、展示案内(ギャラリーツアー)またはギャラリートーク等
企画展	企画展関連の講演会やワークショップを実施する際に通訳を付ける等

上記の取り組みには、在日外国人、あるいは来日観光客向けのサービス向上のため、外国語対応ボランティアを育成するサポート体制の強化している他、関係組織（例えばインターナショナルスクール）と連携協力を行っている等の事例がある。

b.国際交流における研修またイベントの実施

国際交流における研修またイベントの実施については、以下にあげる取り組みがあげられる。イベントについては海外文化を紹介することで文化交流を深めていることが特徴であるといえる。

表2 国際交流における研修・イベントの内容および方法例

	内容	方法
研修	・外国人が利用しやすい博物館について意見を交換するワークショップ ・グローバルおもてなしセミナー等	通訳案内士やネイティブ講師、留学生などを招き、館における国際交流やアクセシビリティ向上に関するノウハウの研修
イベント	・多文化交流を目的としたイベント及び展覧会の企画 ・館外の交流フェスタへの参画	関連組織と連携したイベント及び展覧会開の企画

c.やさしい日本語の導入

やさしい日本語他については、やさしい日本語を用いたパンフレットや展示解説の作成のほか、科学館の実施事業の体験を通じた日本語習得の支援の実施等がある。

②多文化共生事業の対象

多文化共生事業の対象については、以下の7つに分類することができる（N=31）。

- a) 英語が理解できる人（英語を学習中で語学に興味のある日本人も含む）
- b) 英語圏外国人（住民、観光客含む）
- c) 非英語圏の外国人（住民、観光客含む）
- d) 在住外国人
- e) すべての人が対象
- f) 活動テーマに合わせて、文化圏や年齢を設定
- g) 施設の職員、アテンダントスタッフ

③課題

プログラムを実施するにあたっての課題としては、英訳及びネイティブチェックの人材確保、対象における広報、館内職員における異なる文化対応（宗教や慣習など）のノウハウやサービス強化等、在住外国人（日本語能力の差）と来日外国人（英語圏・非英語圏）それぞれに適切な対応、ハード面のアクセシビリティ整備（Wi-Fi環境、アプリの導入等）などがあげられている。

④多文化共生の実現のためのキーワード

今後の科学館・博物館等施設の多文化共生の実現に必要な要素について、上位3つは職員の多文化価値観における対応力、翻訳・通訳など人材確保、機材やインフラ整備であった。

2-5. まとめと今後の課題

科学系博物館を中心とした多文化共生に関する現状として、約9割とほとんどの施設で外国人が来館していることが分かった。また各施設において外国語を用いた情報提供についても、約7割が実施しているが、外国語対応のスタッフの配置については、7割強の施設で配置していない。これらから、外国人が来館した際に、スタッフと直接コミュニケーションを取る機会がまだ少ない状況にあることがわかる。

外国人を対象とした多文化共生プログラムを実施している施設は1割程度であった。実施しない理由として、人材および予算不足の合計が7割あったことから、実施したくてもできない背景があると推測できる。

なお、今回は全データの考察を行うことができなかったため、引き続き館種による傾向や地域差等の傾向について分析を行う他、必要に応じて追加調査も行いたいと考えている。年度末の多忙な時期に回答に協力いただいたすべての博物館の方に御礼申し上げて終わりたい。

博物館等における多文化共生に関するアンケート調査

I. 貴館の基本情報、記入者情報についてご回答ください。

設問 1. 施設名をご記入ください。(必須)

施設名 _____

設問 2. 貴館の館種を 1つお選びください。(必須)

選択肢が当てはまらない場合はその他を選び、館種を記載してください。

考古

歴史

民族

文学

美術

自然史

動物園

植物園

水族館

産業技術

科学

総合

その他 _____

設問 3・ 記入者名をご記入ください。(必須)

記入者 _____

設問 4. 記入者は多文化共生の担当者ですか。(必須)

はい

いいえ

設問 5. 記入者の担当業務をすべて選択してください。(必須)

選択肢が当てはまらない場合はその他を選び、担当業務を記載してください。

総務

広報

教育普及

研究

展示

保存修復

飼育

施設管理

その他 _____

設問 6. 連絡先（メールアドレス）をご記入ください。(必須)

設問 7. 貴館では利用者調査を実施していますか。(必須)

はい

いいえ

設問 8. 貴館では外国人は来館していますか。(必須)

はい

いいえ

わからない

設問 9. 2018 年度の来館者数をご記入ください。(任意)

不明の場合は空欄のままで結構です。

来館者数 _____ 人

設問 10. 2018 年度の来館者のうち、外国人の人数をご記入ください。(任意)

不明の場合は空欄のままで結構です。

来館者数 _____ 人

II. 貴館の外国人向けの情報提供についてご回答ください。

設問 11. 貴館では外国人向けの情報提供を行っていますか。(必須)

- はい →設問 12 に進んでください。
 いいえ →設問 15 に進んでください。

設問 12. 外国人向けの情報提供として行っているものをすべて選択してください。(必須)
選択肢が当てはまらない場合はその他を選び、記載してください。

- ウェブサイトの開設
 パンフレットの用意
 展示解説、キャプションの設置
 解説などのアプリケーション
 その他 _____

設問 13. 外国人対応で使用している言語をすべて選択してください。(必須)

選択肢が当てはまらない場合はその他を選び、使用言語を記載してください。

- やさしい日本語
 英語
 中国語
 韓国語
 タガログ語
 スペイン語
 ポルトガル語
 その他 _____

設問 14. 貴館では外国人対応のための職員またはボランティアがいますか。(必須)

当てはまる箇所を選択してください。

	いる	いない
日本人職員	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
日本人ボランティア	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
外国人職員	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
外国人ボランティア	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

Ⅲ. 貴館の多文化共生プログラムの取り組みについてご回答ください。

設問 15. 貴館では多文化共生のプログラム、イベント等を実施していますか。(必須)

※過去に実施していた、現在計画中または検討中の場合も「はい」を選択してください。

はい →設問 17 に進んでください。

いいえ →設問 16 に進んでください。

設問 16. 多文化共生の取り組みを実施しない理由をすべて選択してください。(必須)

選択肢が当てはまらない場合はその他を選び、理由を記載してください。

予算の関係上

人手不足

地域の支援が得られない

ニーズがない

その他 _____

※設問 16 に回答頂いた方は、以降の設問は回答不要です。最終ページに進んでください。

設問 17. 多文化共生プログラム、イベント等にはじめて取り組んだのはいつですか。(必須)

※計画中、検討中の場合は実施予定日をご記載ください。

実施日 _____ 年 _____ 月

設問 18. 取り組みを始めた（これから始める）理由をすべて選択してください。(必須)

選択肢が当てはまらない場合はその他を選び、理由を記載してください。

設置者の方針

来館者の誘致

外国人来館者の対応

関係団体からの要望

東京オリンピック開催に伴う対応

その他 _____

設問 19. 具体的な取り組みを1つ教えてください。(必須)

設問 20. 取り組みは独自事業ですか。(必須)

- はい
- いいえ
- わからない

設問 21. 独自事業ではない場合、関係団体を選択してください。

選択肢が当てはまらない場合はその他を選び、記載してください。

- 自治体の国際協力課等（在住外国人支援等）
- 外国人支援団体（NPO 等）
- 大学等の研究組織
- 民間企業
- その他 _____

以下、多文化共生のプログラムやイベント等の具体的な内容についてご回答ください。
※複数ある場合は1つに絞ってご回答ください。

設問 22. プログラム、イベント名

設問 23. 対象

設問 24. 実施場所

設問 25. 参加人数（延べ人数）

_____人

設問 26. 参加者国別内訳

設問 27. 通訳有無

有り

無し

設問 28. 参加費（金額）

金額_____円

設問 29. 申込方法

設問 30. プログラム、イベントの概要

設問 31. 実施時に困ったこと・感想等、自由にご記載ください

設問 32. 今後の科学館・博物館等施設の多文化共生の実現に必要な要素について、
3つキーワードを教えてください。

アンケート調査にご協力いただき、誠にありがとうございました。
アンケートにご回答いただいた館には、令和元年度末に作成する当アンケートの結果を含めた報告書を送付させていただきます。

多摩六都科学館
たまろくミュージアム多文化共生推進実行委員会

3. ヒアリング調査

3-1. 豊橋市中央図書館

調査日 2019年7月17日
対応者 田中 久実 氏
豊橋市中央図書館 郷土・レファレンス担当
調査者 高尾・チョウ・原



施設概要

施設所在地	愛知県豊橋市羽根井町 48 番地
分類	図書館
設置者	豊橋市
運営主体	豊橋市
開館年	1983 年 2 月 23 日
開館時間	9 : 30 ~ 19 : 00 (土・日・祝日は 17 : 00 まで)
利用料金	無料
施設規模	敷地面積 : 6,426 m ² 建築面積 : 2,312.30 m ² 延床面積 : 5,655.32 m ²
年間利用者数	32 万 7,722 人 (平成 30 年度)
職員等構成	職員 19 人、再任用職員 2 人、嘱託員 13 名
WEB サイト	http://www.library.toyohashi.aichi.jp/

3-1-1. 調査の目的

当館と同様の社会教育施設である図書館において、多文化共生に関するプログラムを実施していることからヒアリングを実施した。

また豊橋市内の小学校では、放課後子ども教室にて豊橋市中央図書館がプログラムを実施しているためあわせて調査先とした。

3-1-2. 絵本やICTを活用した外国人親子への支援プログラム

(1) 取り組み実施の背景

豊橋市では2019年4月1日時点の人口376,181人のうち17,601人が外国人である。外国人人口の状況として、国籍別人口としてはブラジルが最も多く7,911人、続いてフィリピンが3,685人、中国が1,469人である。外国人人口増加に伴い、市立の小中学校における外国人児童数も増加している。平成12年度では児童数が495人であったのに対し、平成29年度では1,640人と約3倍となっている。

在住外国人が増加している一方で、図書館の利用が少ないことから子ども、大人に限らず図書館や本への興味・関心を高めることを目的に、平成30年度に文部科学省の「図書館資源を活用した困難地域等における読書・学習機会提供事業」の一環である「絵本やICTを活用した外国人親子への支援プログラム」を実施した。

(2) 実施内容

①外国語絵本のブックリスト作成・配付

ポルトガル語(ブラジル人向け)、タガログ語(フィリピン人向け)で作成し、図書館にどのような本が置いてあるのかを知ってもらうことを目的とする。

②絵本の読み聞かせ

③アプリケーションを用いた絵本の作成

「ピッケのつくるえほん」というiPad用アプリケーションで絵本作りを行う。

動物のキャラクターや植物、車などのアイテムをiPadの画面上に並べ、文字を入れたり音声を吹き込んだりして物語を作る。作った物語はデジタル絵本としてiPad上でプレビューができるだけでなく、印刷して紙の絵本を作ることも可能である。

(3) 実施体制

外国人親子に対し、豊橋市中央図書館が読書機会の提供を行い、ネイティブ・アドバイザーが広報としてイベントの案内等を実施する。ネイティブ・アドバイザーはブラジル人協会やフィリピン人協会、外国人就労支援センター等さまざまな外部機関がかかわっている。

(4) 課題

参加をしてくれない親子へのアプローチ方法が挙げられる。図書館のFacebookや、豊橋市の多文化共生・国際課の外国人向けSNSで取り組みについて発信はしているが、なかなか人が集まらないというのが現状である。

また、子どもは参加するが親は参加してくれないというケースも多く、親の参加が今後の課題となる。親が参加してくれない理由の一つに、子どもは学校等の場で日本語を身につけコミュニケーションをとることができるが、親は母語しか話せないため日本語を用いた場に出ていくことが難しいのではないかと考えているようだ。

3-1-3. 豊橋市内小学校の放課後子どもプログラム

(1) 概要

訪問先の豊橋市内の市立小学校の児童数は2019年4月時点で892名である。学校にはブラジル・フィリピンなど外国籍の児童も多く在籍しており、学校では多文化共生を推進している。

(2) プログラムの内容

豊橋市中央図書館の「絵本やICTを活用した外国人親子への支援プログラム」の一環として、豊橋市内の小学校で放課後子ども教室を実施している。在住外国人の児童に対し、アプリケーションを用いた絵本の作成のプログラムを行っている。

調査日には小学1年生から6年生まで、15名弱の児童が参加していた。国籍は多様で、日本語でコミュニケーションをとりながらも時々母語で話す児童もいた。

一人に1台のiPadが支給され、iPadでの作成が完了するとプリンターにデータを送り印刷された小さい絵本の冊子が完成する。絵本には文字を入れることもでき、キャラクターのセリフを入れる児童もいた。文字入力の際にカタカナを使いたがる児童が何名かいた。

宿題が終わった児童から絵本づくりに入れるようで、早く宿題を終わらせて絵本づくりに参加している児童が多いように見受けられた。絵本づくりを楽しんでいる様子が印象的だった。



「ピッケのつくるえほん」冊子の作り方

3-2. 一般社団法人Kuriya

調査日：2019年10月31日（木）

対応者：海老原周子氏

一般社団法人Kuriya代表理事

調査者：チョウ、高尾、原

WEBサイト：<http://kuriya.co/>

3-2-1. 調査の目的

一般社団法人Kuriyaでは、「国や文化を超えて暮らす若者たちが、それぞれの違いを活かしながら活躍できる社会づくりのために、若者たちに次世代を担う人材として活躍する機会を提供し育成すること」を目的とし2016年7月に設立された一般社団法人である。本団体は設立前の2009年に実施した国際交流基金の事業として、外国につながるのある中高生を対象とした映像共同制作のワークショップの立ち上げをした事を始まりとし、これまで約100回のワークショップを実施し、約300人の若者と接し、多くの実践を重ねている。

当館と同地域である東京都（同じ財団では主に23区）を活動拠点として、多文化共生に関する取り組みのノウハウを有し、多文化共生のターゲットと重なることから本法人を調査対象とした。

3-2-2. 在住外国人向けプログラム

（1）取り組み実施の背景

東京23区の新成人の8人に1人が外国人である（2018年1月NHK調べ）。このような日本の状況の中、在住外国人の子どもや大人に向けた支援は存在するが、キャリア形成に必要な時期である若者層への支援は少ない。

代表理事の海老原氏は幼少期の海外生活において言葉がわからず苦勞した経験もあり、支援が少ない若者層を対象とした支援に焦点をあてた。

以前は年に20回ほどアートワークショップを実施していたが、実施の中で在住外国人の社会課題（福祉、貧困、就労、学校中退）が見つかり、進路や進学など教育的なプログラムとして主な実施事業に記載されている事業を行っている。

一般社団法人Kuriyaのコンセプトを一言で表すと「エンパワーメント」。プログラムを通して、「在住外国人＝支援される側」ではなく、自信をつけて自分も貢献できる立場になれると感じてもらうことが大切だと考える。

（2）実施内容

Kuriyaでは、たくさんの可能性を持つ外国人ルーツの若者が活躍する社会づくりを目指し、クリエイティブと出会う場、スキルを磨く場、社会とつながる場の3つの場を通じた人材育成プログラムとして、以下の3つの事業を展開している。本プログラムの主な対象者は外国籍を有する16歳から26歳である。参加者の国籍は中国、フィリピン、ネパール、ミャンマー、タイ、インドネシア、ブラジル等多岐にわたる。

①定時制高校の居場所づくり

社会において孤立しがちな定時制高校に通う外国籍を有する学生がターゲットのプログラムとして2015年より実施している。

週に1～3回大学生とともにアート活動等を通して多文化交流を行う部活動であり、一般社団法人Kuriya、定時制高校、大学と連携して実施している。

②実践型インターンシップ

外国籍の高校生や若者当事者が自ら、ワークショップを企画し、準備、実施、振り返りを体験するプログラムとして2017年より実施。3～4か月を1タームとして実施している。インターンシップという形で自らが担い手となり、責任をもって参加するだけでなく、活動支援金という仕組みを取り入れることで、アルバイトで学費や生計を立てなければいけない高校生や若者にも参加しやすい形とつくっている。

③政策提言

外国人ルーツを持つ人々が直面している社会課題について、現場での支援のみならず環境整備として、省庁や自治体に対して政策提言をし、環境整備を行なっている。

(3) 実施体制

東京都、アーツカウンシル東京、認定NPO法人カタリバ等、さまざまな団体と共同実施している。

(4) 課題

プログラム実施の際に、事前にニーズや参加者の経済状況等を把握してすり合わせが必要だと感じたことがある。経済状況が厳しい参加者の場合、住居と参加場所が離れているプログラムには参加が難しい。

以前行っていたアートワークショップからは、在住外国人の若者にとっては美術館に行く、アートに触れるという体験は非日常であり、継続しての参加が難しいということがわかった。

主な広報の手法は、スタッフの対面による呼びかけである。当初はボランティアとして在住外国人のいる様々な場に出て繋がりを得て、参加者1人1人と関係を作るなど地道な方法で参加者を集めていた。

(5) その他

- ・各行政や在住外国人の支援団体から情報収集するなどニーズのマッチングが大切である。
- ・多文化共生のプログラムの企画段階から在住外国人にプログラム作りに参加してもらうことで信頼関係を築くことができる。

3-3. アーツ前橋

調査日 2019年12月3日

対応者 今井 朋 氏

五十嵐 純 氏

アーツ前橋 学芸員

調査者 高尾・原



施設概要

施設所在地	群馬県前橋市千代田町五丁目1番16号
分類	博物館相当施設
設置者	前橋市
運営主体	前橋市
開館年	2013年10月
開館時間	10:00~18:00
利用料金	1階部分は無料 企画展の観覧料は展覧会により料金が異なる
施設規模	建築面積: 1,932.89 m ² 延床面積: 5,517.38 m ²
年間利用者数	83,121人 (平成29年度)
職員等構成	館長: 1名 副館長: 1名 課長補佐: 1名 副主幹: 1名 主任: 2名 主事: 1名 学芸員: 6名 嘱託員: 1名 (平成29年度)
WEBサイト	アーツ前橋 http://www.artsmaebashi.jp/

3-3-1. 調査の目的

群馬県の在住外国人の人口は2018年12月末時点で56,597人、県人口1,981,214人の2.9パーセントを占める。県では、これを受けて「群馬県多文化共生推進指針」を策定し、施策に取り組んでいる。

調査対象のアーティストのある前橋市では近年在住外国人の人口が増加傾向にあり、多文化共生の取り組みについてアートを通して実施している。

アーティストは市営の美術館であること、多文化共生の先進的な事業を行っていることから、多摩六都科学館と類似性があり、先進事例としてふさわしいことから調査対象とした。

3-3-2. 多文化共生プログラム

(1) 取り組み実施の背景

群馬県前橋市の2018年12月の在住外国人は、県内4位の6,710人であった。前橋市には語学学校が多く、伊勢崎市、太田市や大泉町などの労働者ではなく留学生が増加の理由だと考えられている。

アーティストの基本計画の中に、「地域に根差した文化と世界の様々な価値観をつなぎ、活力と創造力にあふれた前橋文化の醸成に寄与する」とある。前橋市の在住外国人の増加やアーティストの基本計画の背景から、在住外国人にも前橋市民としてアートを通して地域と関わりを持ってほしいという思いから始まった。

(2) 具体的なプログラム

① 滞在制作事業 (アーティスト・イン・レジデンス)

アーティストの活動の場所、時間の提供を行う。

年間3~4組ずつ国内および国外のアーティストを招き、前橋に1~3ヶ月滞在しアート活動を行う。滞在中に作成した作品の成果発表も行う。

海外アーティストに限り渡航費や住居、制作場所の提供、通訳等が前橋のフルサポートとなる。

2018年には事業の中で招聘したアーティストたちの作品を前橋の中央商店街を中心に街の中で展示する「つまずく石の縁-地域に生まれるアートの現場-」を実施した。

2018年度はドイツ出身でベルリンを活動拠点としている2人組アーティストのゲートグンス・ヒルシュと、ベトナムで生まれ、ドイツに移住し現在はロンドンを活動拠点としているスン・テウ氏の2組のアーティストを、国内からは群馬県にゆかりのある羽山まり子氏と群馬県出身の尾花賢一氏の2組のアーティストを招聘した。

詳細は、地域アートプロジェクト2015-2018ドキュメント参照のこと(

<http://www.artsmaebashi.jp/cms/wp-content/uploads/2019/08/6595858e54fcd9c13099a0371690a6ea.pdf>)



活動が紹介されているフリーペーパー

②表現の生態系展

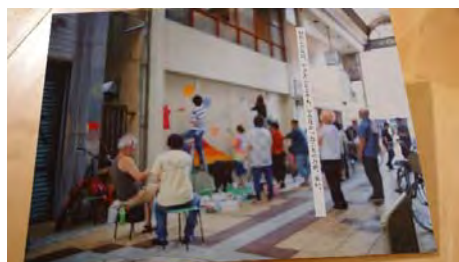
2016年に開始した「表現の森」はアーティストと前橋市内の福祉や教育、医療等の施設、団体が共同で実施するプログラムで、活動方針は同じ団体へ長期的に働きかけることで、文化が届きにくい人へアプローチすることである。このプログラムをアーツ前橋の企画展として開催したものが表現の生態系展である。

a) 企画展会場

会場では、現代だけでなく歴史や異なる地域を横断しながら、世界との関係をつくりかえていく実践こそ現代の芸術に託された重要な役割なのではないかという期待を込め、31組のアーティストの作品やプロジェクトを紹介している。



表現の生態系展 企画展全体の写真



表現の生態系展 企画展会場の展示

b)あかつきの村

多文化共生の文脈としては「Port B×社会福祉法人 フランシスコの町 あかつきの村」がある。あかつきの村は、1982 年より精神疾患にかかったベトナム難民を受け入れた施設である。現在も障害を持つ難民と日本人が入所する施設や通所する作業所などがある。

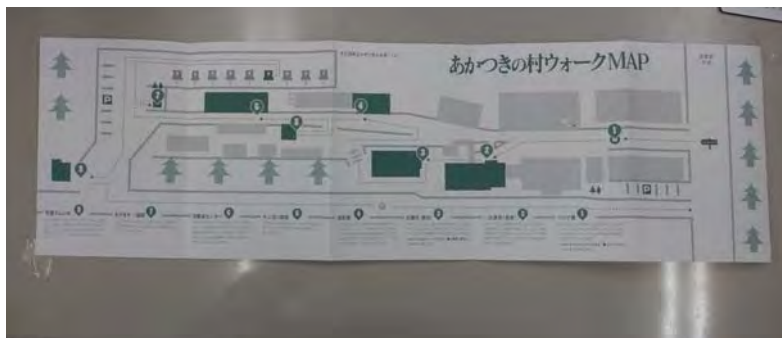
表現の森のプロジェクトとして、この施設の歴史や暮らしている難民の方やそのケアを行っている方のインタビューを通じた《前橋聖務日課》という作品を 2016 年に発表した。2019 年 10 月 12 日から 2020 年 1 月 13 日まで「続・前橋聖務日課 あかつきの村ウォーク」として実際に村の中を見学するプログラムを実施している。

このプログラムは、はアーツ前橋の館外事業である地域アートプロジェクト「表現の森」のひとつであり、あかつきの村を実際に散策する体験型作品である。

あかつきの村は最寄り駅の JR 上毛線北原駅より徒歩 30 分ほどの赤城山の麓に位置する。まわりに店などはない。とても静かな場所である。

あかつきの村は、1979 年にカトリック神父の石川氏が開村した。1982 年よりベトナム難民定住センターとして活動を行ってきた。難民の中でも精神疾患のある人々の受け入れを行う特徴的な施設である。

現在でもあかつきの村では、リサイクルバザー、グループホーム、地域活動支援センター、難民定住促進事業等障害のある人を中心とした生活支援を行っている。



あかつきの村ウォーク MAP

【主な展示】

- ①マリア像
- ②一在楽舎(食堂)
- ③お堂(教会):実際に現在もミサが行われているお堂。
- ④資料館
- ⑤サン君の部屋:2018年12月に亡くなったベトナム難民グエン・バン・サン氏が実際に暮らしていた部屋。重度の精神疾患を抱えていた。
- ⑥旧難民センター
- ⑦あずまや・霊園
- ⑧佐藤さんの家:あかつきの村で精神障害をもつベトナム難民と暮らす佐藤明子氏が使用する家。

(3) 実施体制

アーツ前橋における多文化共生を推進する体制は、前橋市、前橋市内の福祉、教育の医療施設や団体だけでなく、商店街や国内外のアーティスト等の協力により実現している。

(4) 課題

実施事業の際に告知しても情報が必要な所に届かないという現状がある。前橋市の在住外国人は留学生が多く、2～3年で人が入れ替わるため、定着が難しく情報がなかなか伝わらない。また、プログラムに参加する人は、面白そうだから参加するというよりは母国のアーティストや参加者がいるからという理由で参加する傾向が強い。

広報としては、アーティスト自身の SNS で情報の発信を行ってもらい、群馬大学や共愛学園前橋国際大学など学生のコミュニティの活用、つまづく石の縁では日本語学校の生徒たちに母国語に翻訳したマップを作成し配布してもらいなどした。他にはモスクなど同じ国籍の人が集まりやすい場所での活動を行っている。

多文化共生に関して、市や行政の専門との線引きが難しく、アーツ前橋としてはどこまで踏みこんでいくかの境界が難しいという。方針としては、アーティストを中核として意識が広がっていくことを第一とし、来館者の増加は副産物として捉えることとしている。

(5) その他

アーツ前橋では、表現の生態系展において難民認定を受けている人は入館料を無料としている。多文化共生の取り組みを行う上では、当事者の意見を取り入れて、それらを web サイト等で情報提供していくことが重要である。企画展や特設サイトで外部に取り組みを開示することで成果をはかる。

3-4. 北九州市立自然史・歴史博物館

調査日 2020年2月6日

対応者

調査者 高尾・チョウ・原



施設概要

施設所在地	福岡県北九州市八幡東区東田 2-4-1
分類	博物館
設置者	北九州市
運営主体	北九州市
開館年	2002年11月
開館時間	9:00～17:00
利用料金	大人:600円 高校生以上の学生:360円 小・中学生:240円 小学生未満:無料
施設規模	敷地面積 約31,000㎡ 延床面積 約17,000㎡
年間利用者数	484,016人(平成30年度)
職員等構成	館長—副館長—普及課(庶務係/普及係/教育普及担当係)・自然史課(自然史担当学芸員)・歴史課(歴史担当学芸員)
WEBサイト	http://www.kmnh.jp/

3-4-1. 調査の目的

北九州市立自然史・歴史博物館では、平成26・27年度にユニバーサルミュージアム化事業の一環としてやさしい日本語を用いた解説パネルの導入等、多文化共生の取り組みを行っている。

当館と類似した館の特性を持っていること、また博物館としてやさしい日本語を用いた先進的な取り組みを行っていることから調査対象とした。

3-4-2. やさしい日本語の取り組み

(1) 取り組み実施の背景

やさしい日本語の取り組みは、ユニバーサルミュージアム化事業（平成26年度・27年度文化庁文化芸術振興費補助金「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」）の中のひとつである。

ユニバーサルミュージアム化事業は「国際的な文化の交流・発信の拠点として国内外の来館者から幼児から大人まで、また障害者の方までに開かれた、知的アクセス権の保障された博物館を目指して実施する」ことを目的としている。

2年間の助成事業の中で、1年目はハード面（展示等）の実証実験を行い、2年目は1年目の課題消化およびソフト面（受付業務等）の充実をはかった。やさしい日本語事業は2年目（H27年度）に行われたものである。

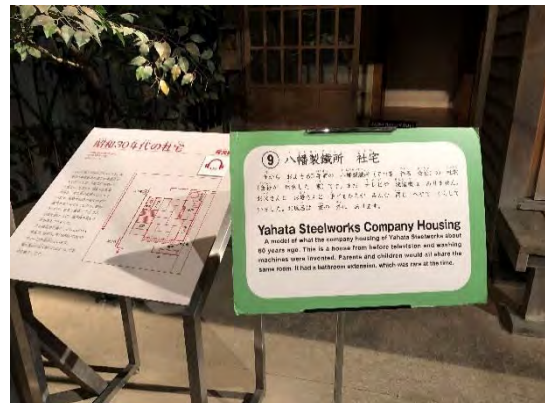
(2) 具体的な取り組み

館内の常設展示の見どころについて、10箇所を選出し、やさしい日本語と英語による解説パネルを作成し、設置している。

対象は、外国語を母語に持つ在住10年程度までの外国人、母語が非英語圏の海外旅行者である。



常設展示の見どころ10箇所の
やさしい日本語・簡単な英語解説パネル②



常設展示の見どころ10箇所の
やさしい日本語・簡単な英語解説パネル⑨

(3) 実施体制

公益財団法人北九州国際交流協会と連携して、パネルの制作、実証実験を行った。

(4) 課題

やさしい日本語及び簡単な英語表記のレベルの設定が難しい。実証実験時に日本在住年数が長いほどやさしい日本語が読みにくいという意見もあった。翻訳について、個人の文化背景が異なるため直訳では伝わらない。

ピクトグラムは様々な種類がある。館オリジナルのピクトグラムは作成せず、普遍的なものを取り入れるようにした。

すべての人にとってわかりやすい展示解説の作成、館づくりは難しいと考える。

4. 当館における やさしい日本語事業

4. 当館におけるやさしい日本語事業

当館では、在住外国人の科学館利用機会創出を目指して令和元年度（平成 31 年度）より「やさしい日本語」によるプログラムの導入を試験的に開始している。

やさしい日本語は、1995 年に起きた阪神・淡路大震災を契機とし、災害発生時に在住外国人にできるだけ早く正しい情報を伝えられるように考案されたものである。文の構造をシンプルにすることで日本語を習いはじめた外国人等でもわかりやすく配慮したものである。

令和元年度（平成 31 年度）は、文化庁の助成を受け、当館の WEB サイトの多言語の一つとしてやさしい日本語のページを開設した他、スタッフ研修、やさしい日本語による 2 つのプログラムを実施した。

4-1. やさしい日本語による WEB 等の情報公開

当館公式 WEB サイトでは、日本語以外の情報として、英語と中国語による開館日時、入場料、アクセス等に関する情報提供を行っていたが、これらに加えてやさしい日本語による情報提供ページ (https://www.tamarokuto.or.jp/easy_japanese/) を 2020 年 2 月 18 日より公開している。やさしい日本語のページへのリンクは、アクセスしやすいように、どのページを閲覧していても上部に常に表示される場所に配置した。また、掲載情報の表現にあたっては、日本に暮らす外国人向けの情報提供の実績を有する株式会社ひらがなねっと（本社：東京都墨田区）の協力を得た。



やさしい日本語 Languages

多摩六都科学館 Tamarokuto Science Center

りようあんない ご利用案内 プラネタリウム かんない館内ガイド アクセス

たまるくとかがくかん し こたいらし ひがしむらやまし きよせし ひがしくるめし にしとうきょうし いっしょ がくかん
多摩六都科学館は、5つの市（小平市・東村山市・清瀬市・東久留米市・西東京市）が一緒につくった科学館で
す。プラネタリウムと、5つの展示室（科学について知ることができる部屋）があります。見るだけではありませ
ん。実験もできます。科学を楽しく知ることができます。

どうえいき きかい おく せんまんこいじょう ほし み
プラネタリウムの投影機（機械）は、「CHIRONII(ケイロンII)」です。1億4千万個以上の星を見ることができま
す。世界で一番たくさんの星を見ることができます。

公式 WEB に実装したやさしい日本語のページ

4-2. やさしい日本語スタッフ研修

当館では整備休館期間を活用し、年に2回程度、全スタッフを対象とした研修を実施している。2019年10月10日に、株式会社ひらがなねっとの有田玲子氏を講師に迎え、やさしい日本語の基本を学び、それらを日々の業務に還元することを目的に行った。その成果としては、SNS(Facebook,twitter)による情報発信や一部の展示でのやさしい日本語解説パネルの併設などがある。以下、概要を記す。

① 実施概要

実施日：2019年10月10日（木）13:00～16:00

講師：株式会社ひらがなねっと 有田玲子氏

参加者：多摩六都科学館スタッフ 37名

会場：多摩六都科学館休憩室

内容：

基礎編として、やさしい日本語の概要と在住外国人の現状について講義を受講し、やさしい日本語の基礎についてグループワークを通じて学んだ。その後、実践編として、日常業務の各所で使用している解説用語等で、置き換えが必要と思われるものをグループ内で議論した後、やさしい言葉の置き換えるワークを行い、最後に実際の場面を想定した成果物の共有を全員で行った。



講義を聴講する



課題に取り組む



グループで話し合う参加者



成果物の作成

4-3. やさしい日本語を用いたプログラム

やさしい日本語を用いたプログラムは、当館の『多摩六都科学館第2次基本計画（平成26年度～平成35年度）ローリングプラン2016』¹⁾に掲げるソーシャルインクルージョンの実現に向けた取り組みの一つとして、在住外国人を対象に平成30年度の事業として平成31年3月にiPadを用いた“やさしい日本語ワークショップ「ワクワクかがくかん」絵本をつくろう”を実施したのが始まりである。

令和元年度については、昨年度に続きiPadを用いた「科学館の絵本をつくろう」に加え、新たに天文スタッフによる「やさしい日本語でプラネタリウムを楽しもう」を実施した。これらの2つのプログラムを実施するにあたり、前年度の課題であった広報の在り方について専門家を交えて検討するとともに、内容については引き継ぎ科学館に初めて来館する層を対象として有識者の意見を取り入れたプログラムの開発を行った。

4-3-1. 広報について

広報については、以下の3つのメディアおよび、多摩北部5市の多文化推進に関わる行政や市民団体の協力を得て実施した。

① ロクトニュース

本プログラムの募集については、当館の広報物である『ロクトニュース vol.105』号に「誰もが楽しめるロクトへ」と題して多文化共生プロジェクトを紹介する特集として情報を掲載した。ロクトニュースは多摩北部5市の全小学校の児童および近隣の市区の小中学校や関係施設に配布しており、発行部数は約21万部である。



ロクトニュース Vol.105 (2019.12) 発行

② やさしい日本語による募集チラシ

それぞれのプログラムの募集チラシをやさしい日本語で作成し、館内配布の他、西
 東京市、小平市、東村山市、東久留米市、清瀬市の市役所および国際交流団体、日
 本語教室等へ配布を依頼した。



やさしい日本語によるチラシ

③ WEB, Facebook, Twitter 等

当館のWEBにて、それぞれのプログラムについて、通常のイベント募集形式とや
 さしい日本語による募集要項を掲載した他、FacebookやTwitterで告知を行った。

4-3-2. 科学館の絵本をつくろう

「ピッケのつくる絵本」を用いたワークショップは、未就学児でも容易に端末を操作できること、ストーリーをつくる過程において、イメージ化だけでなく言語化し、発話を録音するまでが工程に含まれていることに着目し、これらが外国にルーツを持つ子どもたちにとって、科学館体験をアウトプットする際に印象深いものにすると考え導入した。主なプログラムは、科学館を体験後、それらを iPad によるオリジナルの絵本データの作成およびミニ絵本の製作するものである。昨年度に続き講師は iPad アプリケーション「ピッケのつくる絵本」²⁾の製作者である株式会社グッド・グリーン朝倉民枝氏に依頼した。また、昨年度の課題および有識者のアドバイスを受け、募集対象については、外国にルーツを持つ小学生とその親限定から、外国にルーツを持つ小学生を友人に持つ日本人の小学生も対象とした。あわせてプログラムについては、科学館に来たところを最初のシーンとして作成してから作品をつくることへ変更を行った。以下、実施概要を示す。

① 実施概要

実施日：2020年1月12日（日）1回目 10:00～12:30、2回目 13:30～16:00

講師：株式会社グッド・グリーン 朝倉民枝氏

参加者：1回目：希望者無、

2回目：10名（海外にルーツを持つ子ども4名、日本人1名、親5名）

会場：レクチャールーム、常設展示室

内容：参加者の自己紹介の後、各自の興味にあわせて見学する展示室を選択した。見学後、iPadの操作を学び、科学館の展示体験を元に絵本のデジタルデータ、出力したミニ絵本を作成した。あわせて朗読による音声録音を行い、最後に全員で発表会を行った。参加者は図柄だけでなく、音声録音までこだわって作品を作り上げていた。



展示資料をみながらストーリーを考える



iPadで絵本を作成する参加者



デジタルデータを用いた発表会



ミニ絵本を持った参加者

4-3-3. やさしい日本語でプラネタリウムを楽しもう

本プログラムは、当館のプラネタリウムドーム「サイエンスエッグ」が直径27.5mと世界最大級の大きさであること、また投映機「CHIRON II（ケイロンII）」は1億4000万個を超える星々を映し出し最も多くの星を投映するプラネタリウムとして世界一に認定されていること、プログラムはスタッフの生解説であるという場、機械、解説スタイルの特徴を活かした新たな取り組みとして開発を行ったものである。

企画にあたっては、天文担当スタッフを中心に、外国人有識者や外国にルーツを持つ子どもへのプログラム実践者のアドバイスを受けた。以下、概要を示す。

①実施概要

実施日：2020年1月18日（土）16:00-17:30

講師：多摩六都科学館 天文グループ 成瀬 裕子

参加者：5名（外国にルーツを持つ子ども2名、親3名）

会場：レクチャールーム、サイエンスエッグ

内容：第1部は天文に関する言葉のワークショップ、第2部はプラネタリウムドームで星空解説を楽しむ2部構成で実施した。

第1部では、天文に関する言葉やプラネタリウム鑑賞の上で重要となる言葉（星の名前、方角等）について対話型鑑賞手法などを取り入れたプログラムを行うことで、その後の星空解説の理解度を高める工夫を行った。星空解説をやさしい日本語で行うことで子どもだけでなく親も星空を楽しんでいた。



プラネタリウムドーム内で、スタッフより機械の説明を受ける参加者

4-3-4. 課題と展望

昨年と比較しても参加者数の増加がみられなかったことから、広報手法、表現、情報提供先等については、在住外国人のための活動を実践している団体等に対し、引き続きヒアリング調査を実施することで解決策を探る。

あわせて、圏域の団体との連携をより密に行うことで、ニーズにあった実施時期、プログラム内容の検討を行っていきたいと考えている。

- 1) 以下の多摩六都科学館組合 WEB サイト (http://www.tamarokuto-sc.or.jp/modules/info/index.php?content_id=16) で公開中である。
- 2) 「ピッケのつくる絵本」は、以下のサイトからダウンロード可能である。
<https://www.pekay.jp/pkla/ipad>

5. ICOM-CAMOC との共催事業

5. ICOM 京都 2019 および ICOM-CAMOC との共催事業

5-1. ICOM-CAMOC 東京ポストカンファレンスツアー

国際博物館会議（ICOM）では、世界中の博物館関係者が集まる総会を3年一度開催している。2019年は、日本で初開催となるICOM 京都 2019が開催され、120を超える国と地域から4,590名が参加した。

当館では、国際博物館会議（ICOM）京都大会実行委員会および都市博物館のコレクション・活動国際委員会（CAMOC）の依頼を受け、京都大会終了後に行うポストカンファレンスツアーの西エリアのエクスカージョンプログラムの企画、運営を行った。

本ツアーは、東京の東と西に分かれて実施したが、交流会は合同で行ったことから、東京都美術館、江戸東京博物館、上野文化の杜新構想実行委員会、アーツカウンシル東京と共催で実施している。

東京西ツアーは、江戸と多摩エリアをつなぐ「玉川上水」に着目し、その歴史、地形、今日の技術、市民の都市生活とのつながりを体感すること、東京という都市の持つ多様性を短い時間で体験できるように計画を行った。

早朝に京都を出発した参加者21名は、東京駅からバスに乗り、多摩六都科学館、小平市ふれあい下水道館、玉川上水、六本木ヒルズ・森美術館を巡り、最後に東京都美術館で東ツアーと合流した。

多摩六都科学館では東京全域の地形や江戸の発展を支えた自然素材と道路の開削等について展示やその他常設展示、プラネタリウムドームをスタッフとともに視察し、その後科学館の運営に関するランチミーティングを行った。その後、史跡としての玉川上水の散策、小平市ふれあい下水道館において、現在利用されているインフラとしての下水道管の中に入る体験、新たな都市とミュージアムとしての六本木展望台および森美術館の見学、最後に東京都美術館で交流会を行った。

(1) 実施日時

2019年9月8日（日） 10:45 ～ 20:00

(2) ツアー場所

- ①多摩六都科学館
- ②小平市ふれあい下水道館・玉川上水
- ③六本木ヒルズ展望台・森美術館
- ④東京都美術館

5-2. ツアー参加者

西ツアー参加者は21人、参加者の国籍、内訳は以下の表の通り。

表1.参加者の内訳

国籍	人数	職業・所属等
イラン	11人	建築家（2人）、展示デザイナー（1人） イラン国立科学技術博物館 国際業務部責任者（1人） イラン国立科学技術博物館（1人） イラン芸術と文化のキュレーター博物館 研究員（1人） その他（5人）
ギリシャ	4人	展示デザイナー（2人） イギリス ブリストル市立博物館・美術館

		キュレーター（学芸員）（1人） その他（1人）
ボスニアヘルツェゴビ ナ	2人	イギリスの博物館でキュレーター（1人） その他（1人）
オランダ	1人	—
日本	1人	関西大学 社会学部教授（1人）
ポルトガル	1人	—
ロシア	1人	—

5-3. 多摩六都科学館

(1) 時間

10:45~14:30

(2) 内容

①レクチャールームにて高柳館長より挨拶

②館内の見学

スタッフとともに以下の常設展示室、プラネタリウム等の見学を行った。

- ・プラネタリウムドーム
- ・地球の部屋
- ・しぜんの部屋
- ・しくみの部屋
- ・からだの部屋
- ・チャレンジの部屋
- ・カフェ、ショップ



展示室の見学

③ランチミーティングにおける多摩六都科学館の感想・質問等

スタッフとの交流を目的としていたため、参加者から様々なコメントをもらうことができた。
以下にいくつか記す。

- ・スタッフと話せる機会が多く、とても有意義だった。
- ・Hospitality に本当に感謝している。

- ・自分は展示デザイナーだが、今日訪れたような館に作品を展示できたらうれしい。
- ・英語での表示・解説を増やし、外国人でも楽しめ理解できる施設にしてほしい。とてもいい施設だからもったいない！
- ・ロクトはさわれる展示、体験できる展示が多くて、とてもよい。
- ・ボランティアシステムがあるので、情報を届けたい人(地元に住んでいる海外からの人)を呼び込んでその人たち自身にボランティアをしてもらうのはどうか。
- ・ラボにいたジュニアボランティアの存在に感心した。
- ・科学館のスタッフ人数はどのくらいいるのか。
- ・今回は日曜に訪れたが人がたくさんいて驚いた。平日もこのくらい来館するのか。
- ・常設展の展示替えは行っているか、どれくらい頻繁に更新しているか。
- ・近隣の地域などと共同でなにか実施している事業はあるか。
- ・科学館の外側のスペースを有効活用してはどうか、プロジェクトマップなど。
- ・地震が起きた際に、この館はどのような役割をもつのか。



ランチ交流会



エントランスにて集合写真

5-4. 小平市ふれあい下水道館・玉川上水

(1) 時間

15:00～15:40

(2) 内容

①玉川上水

- ・玉川上水沿いの遊歩道で東京都水道歴史館企画調査責任者金子氏より上水について解説



玉川上水の解説



久右衛門橋から玉川上水を観察

②小平市ふれあい下水道館

- ・1階エントランスにて、太田館長より挨拶
- ・地下1階講座室にて微生物の観察、解説
- ・地下5階にて下水道管内(小川幹線)の見学
- ・バス車内にて小平市ふれあい下水道管のPR動画、ゲリラ豪雨時の下水道管内の様子を映した映像を視聴



微生物の解説



下水道管内(小川幹線)の見学

(3) 感想

- ・下水道管に入ったことはない。何事も経験だからトライする！ → 「survivor! (生き残った)」
- ・下水道管の前で写真を撮る人が多く見られた。 → Instagram にアップするとのこと。
- ・他にもこのような施設はあるのか？

(以下、館長の回答)

フランスのパリにある。食べものによって匂いが若干違う。日本人は大豆を多く食べるから、かすかに匂いが感じられるはず。

サッカーなどの大きな試合があると、ハーフタイムに水位が上がる。この間にトイレに行く人が増えるため。

- ・マンホールの写真を撮る人が多く見られた。
- ・こんなにかわいらしいマンホールは自分の国には無い！
- ・お土産のマンホールのカードに喜んでいる人が多く見られた。
(マンホールのカード一覧を見て) コンプリートしたい！

5-5. 六本木ヒルズ展望台・森美術館

(1) 時間

17:00~18:00

(2) 内容

六本木ヒルズ展望台見学、森美術館「塩田千春展：魂がふるえる」自由見学



六本木ヒルズ展望台



森美術館内の様子

5-6. 東京都美術館

(1) 時間

18:30~20:00

(2) 内容

東と西ツアーの参加者が合流し、東京都美術館内のレストランにて「ICOM・CAMOC カフェ」を催し夕食をとりながら交流を図った。

- ① テーブルごとに自己紹介やツアーの感想を話し合った。
- ② 東京のミュージアムでよいと思ったところ等を各自ポストイットに書き出しボードに張り出す。その後、東西ツアーの代表者が出た意見を発表した。



夕食を取りながらの交流会



集まったの意見の発表

平成 31 年度文化庁文化芸術振興費補助金
「地域と共働した博物館創造活動支援事業」

ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プロジェクト報告書

2020 年 3 月 31 日 印刷

2020 年 3 月 31 日 発行

編集兼発行者

たまろくミュージアム多文化共生推進実行委員会

(多摩六都科学館)

〒188-0014 東京都西東京市芝久保町 5-10-64

電話 042-469-6100

2019